

外国語のススメ（教員コラム） 平成21年度バックナンバー

※執筆者の所属・職名は掲載当時のものです。

【第7回】 それでも楽しいドイツ鉄道の旅

経営学部准教授 西口 拓子（ドイツ語担当）

意外なことに、ドイツの電車はよく遅れます。昨年の夏に、シュトゥットガルトからICE（日本の新幹線に相当します）に乗り、カッセルに向けて北上していた時も、例によってダイヤは乱れていました。ただ車内放送で、「この電車は遅れているため、今日はフランクフルト空港駅には停車しません」というのが流れた時には、さすがに我が耳を疑いました。

ちなみに車内放送は、「ご利用いただきありがとうございます」などの挨拶は英語でも繰り返されますが、肝心の情報はドイツ語だけのことが多いのです。「もしも、第二外国語としてドイツ語を履修する学生が旅行をしていたら、聞き取れるだろうか？そしてフランクフルトから帰国する日だったらどうなるのだろうか？」と想像はふくらむばかり、心配になってしまいました。そうこうするうちに、予告通りに、電車は空港駅を通りすぎました。

実は、フランクフルト空港駅とフランクフルト中央駅は、普通電車でも10分ほどの距離にあります。ですから、のぞみが「今日は品川駅には停車するのをやめておく」という感じでしょうか。ただ、フランクフルトは国際空港ですから、国際線に乗る人が搭乗手続きに間に合わなかったらどうするのでしょうか。随分と思いついたことをするものですね。



「2番線」に「10時39分発のICE 73号」、スイスの「Zürich行き」が入線する予定であることが分かります。

三枚目の写真は、同じく昨年夏にベルリンで撮影したものです。（反射しており少々見難いのはご容赦ください。）

一見普通の表示に見えますが、上部中央にオレンジ色でZug fällt ausとあります。Zugは「電車」、残りはausfallenという分離動詞で、三人称単数のためウムラウトもついていて、ちょっと難しい動詞です。主語が「授業」だったら「休講」、ここでは「電車」なので「運休」という意味です。こんなところに大事な情報が書かれていますので、気が抜けません。



ところで、ホームやICEの車内で、ドイツ人（ゲルマン民族?!）の大移動を見かけることがあります。なぜ大勢の人が急いで移動して行くのか、その謎を解くヒントは2枚目の写真に写っています。上部の白地部分にheute umgekehrte Wagenreihung、つまり「今日は号車の並び方が逆になります」と書かれています。例えば、指定席をとった人が、ホーム前方のAの標識の辺りで電車を待っているとします。ところが、直前になって上のような表示が出て、今日は「逆」で後方のGに行かなければならない、

なんてことが時々起こるのです。電車の中での大移動も何度か目撃しました。でも、そんな時も心配は御無用。だからこそ声をかけあい助けあうのです。そうしてZeppelin（ツェッペリン）社で働く方との会話が始まり、その後車内で楽しいひとときを過ごしたことを思い出しました。その話は、長くなるのでまたの機会に。

(2010.03.15)

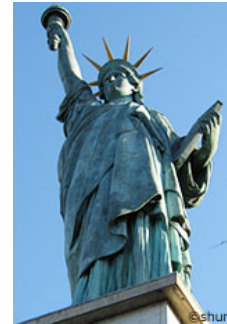
LL運営委員の一員としてコラムの執筆がまわってきました。しかも、誰もが忙しい年末年始の時期です。何を書けばよいのか参考しようとする他の先生がたのコラムを読んでみたのですが、おもしろくてすっかり自分の仕事も忘れるところでした。それからいろいろとバージョンを変えながら書き始めてみたのですが、どれも気に入らないのでやめました。おそらく、さまざまな雑念が頭に入ってきているからだと思います。今これをキーボードに打ちこみながらも入ってきています。そのうちの1つをテーマにして、学ぶことについて書いてみたいと思います。すなわち、「これって何の役に立つわけ？」

「〇〇は何の役に立つのか」。これは大切な問いだと思いますが、少なくとも大学生として4年間過ごすことを決意した人（決意しなくても入っちゃったらそうなのです。ほくだって日本国民になろうと思って生まれてきたわけでもないのに、父親が出生届けを役所に提出してくれたので、日本国憲法に右手をついて宣誓もしてないのに、ありがたいことに日本国の一員です。というわけで、権利とともに義務もついてまわっております）は、これについては考え直したほうがよいと思います。すなわち、「役に立たなくてもいいんじゃないの？」

そうです。大学で学習するにあたっては「役に立たなくてもいいんじゃないの」の精神で勉強することです。「役に立つ」というのを「期待」に変えてもいいと思います。たとえば、「英語」を勉強していると試験に合格するとか、就職に有利とか、人柄が変わるとか、といった期待です。そのような期待に応えるために「英語」があるわけではありません。「ドイツ語」も「フランス語」もそうです。また、期待は必ずしも応えてもらえるわけではありません。期待していて、それがかなえられなかったときのショックは大きいですよ。ですから、もともと期待とは縁のないものに（いや、あなたが勝手に期待しているものに）期待しないほうがよいということです。

期待するか、期待しないかは個人の自由ですから、無理強いはしません。でも、期待はこちら側からの一方的な想いの場合もあるのだということ、そしてそのような一方的な想いは無視されるとか応えてもらえないこともあるのだということを心にかみしめつつ、期待することです。やっても期待どおりにならないかもしれない、役に立たないかもしれない、無駄に終わるかもしれない。このような（こころの）自己防衛策をもつことも必要でしょう。それをふまえたうえで、一方的な想い、期待をするのならよいと思います。

このように考えると、おそらく自分と「英語」の関係が見えてきます。何で「英語」を勉強するんですか。「英語」が好きだからです。好きなので四六時中いっしょです。だから、「英語」のこともだんだんわかってきました。いや、まだまだわからないことだらけですけど、これからも「英語」のことを理解するように努めたいと思います。でも、一つ悟ったことがあるんです。「英語」といってとてもよかったなことが。生活に弾みが出るっていうか。「英語」って結構モテるんで、「英語」通じていろいろな人と知り合えたりしてね。無心で「英語」とつきあってきましたけど、今では「英語」と出会えてよかったな、って思いますね。



これって、「英語」を「〇〇さん」や「△△くん」に置き換えてもよさそうですね。人との関係はこんな風にありたいものです。それでも、人のなかには、人のことを役に立つか否かで見られる場合もあります。寂しいですが、そういうことってありますね。とりわけ、昨今の経済活動での人材という言い方はあまりいい印象がもたれませんね。英語では"human resources"と言うのですが、"resources"っていわゆる資源ですからね。あの石油とか鉄鉱石とかです。たとえば、河川のことを考えてみてください。社会科で習ったのは、川がいかに私たちの生活に役立っているかということでした。しかし、川の立場（仮にあるとすればですが）からみたら、人間の生活に役に立とうなどとは思っていないとも考えられませんか。石油のように何にでも変わるので重宝がられたにしても、枯渇してしまったらどうなるのでしょうか。こんな風に扱われてしまったらイヤですね。



もう一つ、別の例を挙げてみましょう。「たとえ」ですから、これを読み進めて、変な解釈をして憤らないように願いますね。たとえば、法学を志望する人のなかには将来弁護士や裁判官のような法曹界で活躍したいと考えている人が多いようです。というわけで、進学塾の広告のように、司法試験〇名合格！とか喧伝されています。商経営学系であれば公認会計士〇名合格！などと張り紙がしてあります。がんばって難しい試験をパスしたので、褒めたたえてあげることはいいことだと思います。でも、パスしなかった人たちはどうなのでしょう。基準点があつて、パスする人、パスしない人がいて当然なのですが、パスした人だけが主人公になるような考え方はよくないですね。というのも、これらもきちんとした姿勢で見つめなければ、「〇〇は何の役に立つのか」という考えを肯定し、また「〇〇を学ぶこと」の前提にされてしまうように思われるからです。（もちろん、パスした人はよかったね、すばらしいですね、の気持ちにうそはありませんけれど。）

つまり、「法学」だって、役に立つか立たないかで学ぶものではないということです。司法試験に受かって受からなくても、「法学」を学んでよかったね、ということがあからなのです。それはおそらく「人は役に立つか立たないかでその価値を決定されるのではない」という基本的な人権に対する尊さであるでしょうし、「そのままの自分を肯定して生きていく」態度でもあるでしょう。そのような姿勢でのぞめば、「法学」が、うまく利用するために学ぶものではなく、このような（青臭いと嘲笑されてしまうかもしれない）考えを分かち合える社会に近づくためにわたしたちが何をしたらよいのかを考えていききっかけを与えてくれるものだということがわかるでしょう。

だからこそ、言うのです。少なくとも大学生として4年間過ごすことを決意した人は、「これって何の役に立つわけ？」という問いを立てずに、「役に立たなくてもいいんじゃないの？」という姿勢で学びに向かってみていいのではありませんか。

今は「韓流」という言葉がそれほど目新しくもなくなった。それに円高のおかげで韓国旅行に行く人も多くなっている。学生たちも例外ではない。

先日、学生たちと韓国旅行について話を交わした。彼女たちが韓国へ行った時、本場のピビンパが食べたくなって、通りかがりのおばさんに「ピビンパのフランチャイズ店はどこですか」と聞いたが、よく通じなかったという。それは当たり前で、韓国語では「フランチャイズ店」という言葉は、まだあまり一般的ではなく、「チェーン店」のように通じないからだ。

結局、彼女らは「ピビンパが食べたいです」という言葉を何回も繰り返し言ったらしい。そうしたらそのおばさんは、やっと分かったとうなずいてくれ、二人を食堂へ連れて行き、そこで一緒に食事をする事になり、しかもその食事代まで、そのおばさんが払ってくれたのだと言う。彼女らがどんなに感激したかは想像に難くない。

日本でならありえないことなのかもしれないが、韓国ではたまにはあることだ。私の80代になる母も、外出先で通りかかりの女性に、近くによい食堂がないかどうか尋ねたら、自分も丁度お昼を食べようとしていたところだった言いながら、一緒に食事をしたうえ、食事代まで払ってもらったことがある。母は勿論、その話を聞いた私も、なんていい人なんだろうと感動した。とはいっても、一般的に韓国人が特別に親切かということ、そうでもなさそうだ。

例えば、人に道を尋ねると、日本人なら曲がり角が見えるところまで、とまでは行かなくとも、少なくとも何歩か一緒に歩きながら教えてくれる。が、韓国人はただ口だけで済ませる。他のことでも、韓国人に特別に気前がよいと感じられるところがあるわけではない。そうだとすると、ひょっとしたら韓国人にとっては、「食事」というもののだけが、特別なかもしれない。



韓国人は何人かが一緒に食事をするときには、たいていは、割り勘ではなく、その中のだれかが一人で金を払うのが普通のやり方である。そして、次にコーヒーを飲みに行くときには、また別の一人が払い、また次回に食事をするときには、さらに別の一人が支払う。たまには、いつもおごられっぱなしの人がいることもあり、そのような人は、皆の皿を買いはしても、それはそれで他の人も大目に見てしましてしまう。食事代の、このような払いは、長い時間で平均して見ると割り勘と差がなくなるが、いずれにせよ、とにかくあまりきちんとケジメつけず、井勘定で済みますのが韓国式なのである。食べ物についていえば、人情の厚さは商売にも残っていて、物価が東京とあまりかわらないソウルでも、大抵の食堂では、メイン料理以外のキムチやナムルなどのおかずや、ご飯のおかわりは自由である。

韓国のドラマには食べるシーンが多い。その中で日本人の目から見ておかしく感じるシーンがある。それは、大きなボールにピビンパを盛って、全員でそのボールを囲み一緒に食べる姿ではなからうか。鍋でラーメンをゆでて、そのまま鍋ごと一緒に食べる場面も同じだろう。日本人の目には単にめずらしく面白くだけ見えるかもしれない。が、実はそのようなシーンには特別な意味がある。それは、一緒に食べる人同士が、特別に親しいことを表している。もしそれが恋人同士だったら相手に口を「あん〜」させ、箸やスプーンで美味しいおかずや自分の食べる分を食べさせてやる場面となるだろう。

今では衛生的な面に神経を使うので、ほとんどなくなった慣習もある。それは、お酒の席で各自銘々の盃があるにもかかわらず、自分が飲んだ後、自分の盃を相手に渡し、それにお酒を注いでやるのが、宴席での礼儀であった。そして受けたほうは、特に、目上の人から盃を渡された時なら、それを両手を合わせて受け取り、注がれた酒は顔を横そむけて一気に飲む。目上の人から渡された盃は親密さだけでなく、さらに部下または後輩として認められた、という意味もあるのである。



韓国人はご飯にせよ酒にせよ、「自分のものを分けて」相手に与えることで、「自分」と「相手」の隔たりがなくなり、一つの輪の中にいるという感じを持つのではないだろうか。その時、相手に与える「食べ物」は、自分の心の広さの象徴なのであり、だからケチケチすることはできない。昔、客を招いて食事を出す場合、食べきれず食べ物がいっぱい残るほど出さねば主人の恥だと思っていた。また客の方でも、いくら美味しくても全部は食べきれないことを表すために、残さなければならなかった。こうした習慣も、さきほどの事を考えると、単なる浪費ではなかったと理解できる。そうすれば、韓国人が人に会った時の挨拶で「ご飯を食べましたか」とか、「いつか一緒に食事でもしましょう」と、よく言う意味も分かるような気がするのではないだろうか。

(2009.12.15)

タイトルの"flu"、何のことでしょう？答えは、"influenza"、そう、いま巷を騒がせているインフルエンザのことです。日常会話の中では、単語の真ん中をとって、"flu"というのですね。"I got (the) flu." "I was down with the flu."などはよく聞く表現です。またニュースでもわざわざ"influenza"ということはまれで"flu"ということのほうが多いです。

新型インフルエンザ（英語圏では"swine flu"—豚インフルエンザ—と言っています）の存在が騒がれ始めたころ、海外ニュースを眺めていた私は、ある製薬会社のベルトコンベアにインフルエンザ薬が流れてくる場面に出くわしました。ベルトコンベアに乗った箱には"TamifluR"。実はそのときはじめて、インフルエンザの治療薬「タミフル」のスペルを認識したのでした。



Wikipediaより転載*1

そして気付いたのです、もしかしたら「タミフル」は"Tame the flu"だから「タミフル」なのではないかと。"tame"とはもと「(鳥や獣を) 飼いなす」という意味で、そこから「おとなしくさせる、抑える」という意味になります。つまり「タミフル」とは「インフルエンザをおとなしくさせる」という意味が込められた商標なわけです。（ちなみに、「リレンザ」のスペルは"RelenzaR"。同じような発想で、おそらく"relent influenza(インフルエンザを和らげる)"ではないかと思うのです。）

そして、同時に脳裏をよぎったのが、"the taming of the shrew"というフレーズ。一体何のことかという、日本語では『じゃじゃ馬馴らし』と訳される、有名な劇作家シェイクスピアの喜劇の題名です。この話、とんでもない跳ね返りのじゃじゃ馬娘("shrew"とはそういう意味です)を、ある男が見事に手なずけて、おとなしい、しとやかな妻に仕立て上げるというものです。世の女性たちから一斉にブーイングされそうな内容ですが、これがやりようによっては非常に面白く、世間に合わせて振る舞うとはどういうことなのか、など笑わせながらいろいろと考えさせてくれるのです。



Wikipediaより転載*2

Augustus Egg, The Taming of the Shrew

きっと「タミフル」の名付け親の頭には、英語圏ではあまりにも有名なこの『じゃじゃ馬馴らし』(The Taming of the Shrew)がひらめいたのではないかしら？だって、"flu(フルー)"と "shrew(シュルー)"は韻を踏んでいるもの。似非(えせ)語源学の域を出ない話ではありますがそんなことを思いつくと、暗い話題でもクスリと笑いたくなります。そして、たかが商標だけれども、その背後には言語が持っている文化背景があるのだということを改めて感じた一幕でもありました。

ちなみに、私が見ていたのはNHK-BS1の「ワールドニュースアワー」。各国のニュース番組をオムニバス形式で放送する番組です。アメリカやイギリス、フランス、ドイツ、スペイン、ロシアなどの欧米系メディアはもちろんのことカタールのアルジャジーラ(アラビア語)、中国、韓国など実に様々な国のニュースを聴くことができます。同じニュースでも国によって見方が違ったり、またそれぞれの国のいまの関心事を知ることができたり、日本の国際ニュースを見るのともまた一味違って面白いですよ。副音声にすると分からないながらもいろいろな言葉が流れてきて新鮮です。

それにしてもインフルエンザ。心配ですが、よく手を洗って、よく食べて、よく寝て、よく笑ってとにかく体力をつけておきましょう。そして学生ですもの——よく勉強してね。

1. This image has been released into the public domain by its author, [[[:Wikipedia:en:Mori]]] at the English Wikipedia project. This applies worldwide.

<http://en.wikipedia.org/wiki/File:Tamiflu.JPG>

2. This image is in the public domain because its copyright has expired.

http://en.wikipedia.org/wiki/File:Taming_of_the_shrew.jpg

2008年の秋から2009年の春にかけてリヨン第二大学の東アジア研究所に滞在した。その時に会った専修大学の3人の留学生について話したい。

リヨンに着いた9月末、すぐに出会ったのは文学部のN君と法学部のT君である。二人は、2008年2月末のリヨン到着以来6ヶ月の語学研修を終え、9月から大学の授業がはじまったばかりだった。すっかりリヨンの生活になれていて、地下鉄やバスの乗り方、レンタル自転車の借り方などを丁寧に教えてくれた。

リyonは、ローヌ川とソーヌ川の合流点にあるフランス第二の都市である。周辺も含めると人口160万人といわれるが、中核となる市街地はコンバクトで住みやすい。ぼくは、ユーロ使用がはじまった2002年3月に集中講義のために1ヶ月滞在したが、その後、わずか6年ほどの間に町はすっかり変わっていた。とくに便利になった交通機関の制覇のしかたをN君とT君に教えてもらったのである。

ぼくがN君とT君にあって驚いたことが2つある。1つは、2人がおそろしくよく食べ、かつ飲んだことである。ぼくが住んでいたのは大学から徒歩5分くらいの2DKだが、簡単な台所がついていた。そこで用意できるのはスパゲッティとかカレーライス、それにステーキとサラダ、茹でたエビくらいのものである。夕方7時くらいに初めて11時すぎに食べ終わる頃には、冷蔵庫はすっかり空っぽで、ビールとワインのストックは底をついていた。



ぼくが、もう1つびっくりしたのは、2人がすっかり大学生活にとけこんで、なんの違和感もなく暮らしていたことである。彼らは2人ともサッカーファンで、ぼくのアパートに食事に来るのは、たいていサッカーの練習の後だった。大学の友達とサッカーをして、お腹をすかせてやってくる。サッカー仲間とは、言葉の問題はなにもない。

大学の授業についても同じである。日本では勉強したこともないようなテーマの授業に出ているので、ぼくが「ダイジョブ？」と聞くと、「なにがですか」と逆に聞き返す。専修大学で2年間勉強し、リヨンで6ヶ月集中授業を受けた程度のフランス語で「そんなに気楽に単位が取れるのか」というのが、ぼくの心配なのだが、彼らはぜんぜん心配していない。

世の中は、変わったものだ。ぼくが実に40年前に23才でベルギーに留学した時は、もっとずっと緊張していた。この違いは、いったい何なんだ？

もちろん、それは「タフな精神と体力をそなえた専修大学の留学生T君とN君」と「脆弱で心配性のぼく」という個人の能力差の問題だろう。しかし、その一方で、留学生を受け入れる大学の制度が変化したのも事実ではないだろうか。

かつては「フランス語のできないヤツは、フランスの大学に来るな」という人たちが、「多少、言葉の問題があっても、能力とやる気のある学生には、できるだけ単位をあげよう」という顧客志向に変わったのではないか。留学が、とてもカジュアルになってきたのである。事実、N君とT君は、ちゃんと試験に合格し、単位をとり、2月に帰国した。

専修大学3年生としての1年間をリヨンで過ごした2人は、無事に4年生となり、留学先のインターネットで就職活動を開始したT君は、希望した企業の内定を手に入れた。N君は、大学院への進学を目指している。

2月にT君とN君の2人が帰国すると、入れ替わりに法学部のK君がやってきた。K君の語ってくれた留学生活も面白かった。



K君は、帰国したN君とT君と同じ「アリックス」という学生寮に住んでいた。そこはリヨンの丘の上で世界遺産の旧市街の道路ひとつ隔てた向こう側である。寮のなかには、なんとローマ遺跡まであるのである。



この「アリックス」には、家賃100ユーロ(13000円位)の部屋と300ユーロの部屋がある。K君は、100ユーロの方に住んでいた。こちらは家賃が安い分、トイレ、シャワー、キッチンが共同である。この100ユーロに、最近、中国人の留学生が殺到した。住人は、圧倒的に中国人なのである。

そこで困ってしまうのは、彼らが台所を占拠してしまって、気の弱い日本人はなかなか使わせてもらえない。自炊の時間がないのである。それでもK君はがんばって、自炊で通すことにした。アリックスには学生食堂もあり、3ユーロもあれば、それなりの食事ができるのだが、とにかく頑張ることにした。

キッチン以上に困ったのはトイレである。これは男女共用だし、トイレの鍵が壊れていて、扉をおさえていないと開いてしまうということもしばしばだ。シャワーだって、共同だから使用時間がかぎられる。



ぼくが、見かねて「100ユーロはやめて、300ユーロの方に移ったら」と勧めると、「100ユーロの方でがんばる」というのである。100ユーロの部屋で我慢して、貯めたお金で旅行するのだそうだ。K君は、みかけは華奢で優男なのだが、精神がタフなのだ。

K君に関して、ぼくがもう一つ感心したのは、語学校のことである。K君の通う学校は、大学付属なので、料金が安く、ここにも中国人学生が殺到する。フランス語のクラスは、気がつけば周りには中国人しかいない。中国人は、だいたい中国人同士で行動するから、授業が終わってもサッと帰ってしまい、K君には話し相手もない。去年のN君とT君は、こんな状況でも、日本人同士で助け合ったり、話もできただろうけれども、K君は、たった一人なのである。

ぼくは、さっそく日本語を勉強しているフランス人に声をかけ、サポートを頼んだけど、K君の言い草がふるっている。「ぼくは、かならず中国人と友達になってみせます。授業が終わったら、中国人と話をしたり、散歩をしたりしたいんです。」

なるほど、フランスに来て中国人と友達になるのか。そういえば、ぼくにも留学時代に知り合った40年来の韓国人の友達がいる、などと反省したが、とにかくK君はタフである。

「タフでなければ生きられない。優しくなければ生きている価値がない」というレイモン・チャンドラーの名せりふがあるが、専修大学にも、こういう「ハード・ボイルドな」学生がいるのだ。留学することとは、言葉や文化を身につけることだといふけれど、こういうタフな精神に磨きかけることでもあるのだと、あらためて思い至った次第である。



(2009.10.15)

今年は私にとって珍しい一年になりそうです。というのも、春には韓国を、夏にはロシアとフィンランドを訪れることになったから。二つの旅の共通点は、英語が街中での共通語として通用しない国であること、それから私にはその地の文字さえ読めないことです。これは困った事態でした。

これまで旅したことのある国々は、少なくとも共通語としては英語がかなり通じだし、ローマン・アルファベットを使っているので文字と音の関係は想像できることが多かった。「ありがとう」とか「水ください」くらいは泥縄方式でも覚えて使うことができました。ところが、文字が読めず音韻組織の実感が掴めないと、ちょっとやそっとの予習では最低限の挨拶さえ頭にも口にも全く定着しないのです。



結局、韓国では、4日の滞在が終わるころになってやっとイントネーションや音の特徴に慣れ、美しいと思うようになり、ごちそうさま、美味しかったなどが口をついて出るようになりました。が、最後まで看板の文字は2分くらい考え込まないと読めないままで、常にその下の小さな英語標記を凝視して過ごしました。成田に着いて看板が読めたときの開放感は忘れることができません。やっとおぼえたいくつかの文字や表現さえ、帰国後1週間で雲散霧消、脳にひっかいた痕さえ残らなかったみたいです。

そして今、今度は夏のロシア・フィンランド滞在の前に、深夜、キリル文字を暗号のごとく眺める習慣が始まっています。昔ギリシャ語を学んだおかげでハングルよりは少しなじみがありますが、それにしても、音にするのが難しいこと。音にできないせいか、これまたちっとも頭に定着していきません。アルファベットが英語と同じフィンランド語とてけって御しやすいわけではない。フィンランド語は、同じ北欧でもスウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語とは違って、ゲルマン語族（英語やドイツ語などと起源・派生を共有する言語の「家族」）とは違う系統の言語なのです。もちろんラテン系（フランス語、イタリア語などの語族）の類推も、全く役にたちません。

キリル文字

大文字 … А Б В Г Д Е Ё Ж З И Й К Л М Н О П Р С Т У Ф Х Ц Ч Ш Щ Ъ Ы Ь Э Ю Я

小文字 … а б в г д е ё ж з и й к л м н о п р с т у ф х ц ч ш щ ъ ы ь э ю я

悩みつ、でも、私はいくつかの感動と教訓を得ています。

何より、私たちの多くは世界に数千あると言われる言語の、ほんの一部しか知らないのだという事実。人間として同じ遺伝子と発声器官を持ちながら、それぞれの言語がほんとうに多様な文法体系、音体系を作り出している不思議、それでいて人間に普遍の概念や思考を支えている不思議。そうした多様性と共通性を共有する「人間」に対するつきない興味と愛情。そして、それを知るために、やはり言語ってすばらしい窓口だという再認識。



国際共通語としての英語の重要性を強調しつつ学び教えていると、どうも英語さえできれば国際社会では困らないような気がしてしまいがちです。学生の中にも、英語の圧倒的優位を疑わず、時にはそれは「英語が言語として論理的であり優れているからだ」などと思い込んでいる人さえいます。

でも、それは絶対に間違いです。外国語は英語だけではないし、国際的に使える共通語も英語だけではない。確かに今現在は英語が有用かも知れませんが、でも、英語が現在国際共通語としての地位を保っているのは人間が織りなしてきた歴史の偶然的産物であって、何も言語として英語が優れているからではないのです。いろいろな言語を学んでみると、どんなに英語が「変わっている」かに気づきます。まして、国際共通語としての英語の覇権がいつまで続くかなんてことも誰にもわかりません。

英語の限界を知った上で、英語を学びましょう。そして、もっといろいろな、たくさんの方の言語に近づいてみましょう。日本語とどこが違うのか、考えてみましょう。言語が違うとは、世界の切り取り方が違うということ。人間や世界を深く多角的に捉える目を養うこと、それこそが大学で外国語を学ぶ意味なのだと思います。

それにね、もうひとつ。若いときだからこそ、新しい言語もすんなり頭に入ってくるのですよ。どうぞ「今」というチャンスを逃さずに！

(2009.07.15)



専修大学130年の記念行事の一貫として、専修大学フィルハーモニー管弦楽団がベートーベンの第九交響曲を演奏する。十数年ぶりの再演である。12月5日（土）の午後、クラシック音楽ファンには最近の注目となっているミュージア川崎のシンフォニーホールを使う。壮麗かつ輝かしい第四楽章の「合唱」団員募集で、学生のみならず教職員や育友会員、さらに地元の川崎市民も大勢集まって、6月5日に第九合唱団の結団式が行われた。以後、本番まで何回もの練習が待っている。

ほとんどの方が第九は初めて、合唱も初めて、そもそもドイツ語も初めての「初めて」づくしの不安を表明しつつも、「一度は第九を歌ってみたかった！」との期待を口々にくり返し、あらためて日本におけるベートーベン人気を再確認した。

第九の合唱は複雑なコード進行や難しい音程も比較的少なく、異常に高い音の連続を除けば、合唱作品としてはそれほど難しい

わけではない。それにもかかわらず、フルオーケストラと共に歌い上げる「歓喜」の盛り上がりは一級品で、まさに、実に、圧倒的としか言えない「歓喜」の経験となる。

とはいえ、楽聖ベートーベンの音楽は、典雅で格調の高いシラーのドイツ語の詩の響きとみごとに対応するので、厄介なのはドイツ語の「発音」である。日頃、ドイツ語を勉強する学生諸君の苦勞を知っている身としては、いささかのお手伝いができればと思っている。私の授業を受けている学生には耳にタコであろうけれども、少し基本のキを説明してみたい。

合唱冒頭に響くのが「フロイデ（歓喜）！」という言葉である。まずバスが口火を切って歌うと、すぐ続いて合唱団が圧倒的な迫力で繰り返す。ここで失敗すると、後がメチャクチャとなる大事な一声であるのだが、これがなかなか難しい。注意すべき所は多々あるのだが、その中で一点だけを説明してみよう。

カタカナで「フロイデ！」と歌うと、日本語の特質によって、どうしても後に引っ張る感じになって「ふろいでえ〜」となる。ドイツ語はアクセント感覚の強い言葉で、最初の母音である「ふろおいで」の「お」にアクセントがある。アクセントに続く母音は弱音となり、アクセントの「お」の後の母音は軽く、あいまいに、めだたなくなる。「ふ・ろ・い・でえ〜」の4音節ではなくて、ほとんど「お」のみの1音節のように響き、だ・か・らティンパニーがバ〜ンと突然に叩かれるような強い衝撃の響きの迫力が出てくるのである。

ところがカタカナで「ふろいでえ〜」と後に引っ張ると、それは「お風呂やでえ〜」歌われる演歌が浪花節のように、全体にベタ〜とした湿っぽい雰囲気になってしまう。ベートーベンを演歌に変えること自体は、アヴァンギャルド好きのわたしとしては、それはそれで魅力的な試みに思えるのだが、この場合、やはり趣旨が違うと言わざるをえない。

新しい外国語を学ぶとは新しい発音を学ぶこと、つまりは新しい身体の使い方を学ぶことであり、それは従来、眠って隠れていた身体感覚をつねに新たに活性化することにつながる。ことばを学ぶ本当の意味は、そこにこそあるのではないだろうか。

とはいえ12月まで、お互いに苦勞しつつ、共に楽しみたいと願っている。

■関連リンク

▶ [創立130年記念事業 第九特別演奏会](#)

(2009.06.15)